Title	快楽の質に関するJ.S.ミルの見解について
Sub Title	J.S. Mill's quality of pleasure
Author	水野, 俊誠(Mizuno, Toshinari)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2009
Jtitle	エテイカ (Ethica). Vol.2, (2009.) ,p.23- 42
JaLC DOI	
Abstract	<p>In his book "Utilitarianism" Mill introduced the view that there are different qualities of pleasure into the framework of Bentham's utilitarianism. But he did not explain clearly what the quality of pleasure consists of. Therefore, the aim of my paper is to investigate what he had in mind with this notion.</p> <p>First, I will critically examine the interpretation that quality of pleasure is reducible to quantity of pleasure, i.e. that a qualitative difference of pleasure is in the final analysis just a large quantitative difference: This reading, though, does not have sufficient textual evidence and in fact is even at odds with Mill' s text. Secondly, I will try to show that the interpretation according to which quality of pleasure is to be analyzed as kind of pleasure points into the right direction, but does not make sufficiently clear what a kind of pleasure is. Consequently, I shall try to complete this account by understanding the relation between different kinds of pleasure in a way similar to the relation between real numbers and imaginary numbers.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20090000-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

快樂の質に関する J.S.ミルの見解について

水野俊誠

はじめに

『功利主義』においてミル (John Stuart Mill) は、快樂には質の相違があるという考え方を功利主義の枠組みのなかに持ち込んだ。しかし、ミルは快樂の質とは何かを明確に説明していない。そこで本稿では、ミルのいう快樂の質とは何かを明らかにすることを試みる。以下、まず快樂の質に関するミルの叙述を概観する。次に快樂の質の相違が量の大きな差であるという解釈を、さらに快樂の質をその種類とみなす解釈を検討し、それらを踏まえてミルのいう快樂の質とは何かについて考察する。

ミルのいう快樂の質とは何かという問いと、2つの異質な快樂のうちどちらが望ましいのかという問いを区別しなければならない¹。第2の問いについては別稿ですでに論じたので²、本稿では快樂の質とは何かという第1の問いのみを考察の対象とする。

(I) 快樂の質に関するミルの叙述

功利主義の基礎にある人生観が豚にのみふさわしいものだという批判に対する応答のなかで、ミルは快樂の質に関する自らの考え方を提示している。功利主義の基礎にある人生観とは、「快樂および苦痛の不在が目的として望ましい唯一のものであるということ、さらにすべての望ましいもの（それは功利主義の体系においては、その他のどのような体系に

においてとも同じようにたくさんある)はそのなかに含まれた快樂のために、または快樂を増し苦痛を防ぐ手段として望ましいものだというのである」(CW10, 210)。この人生観に嫌悪を感じる論者は、「人生が快樂より高級な目的—快樂より善く、快樂より高貴な欲求と追求の対象—はないと考えることを、まったく野卑下賤とみなし、豚だけにふさわしい学説であると称する」(CW10, 210)。

この批判に対するミルの応え³は、「人間本性を下劣な光のなかで描き出したのは、自分たちではなく、彼らを非難する人たちである。なぜなら、その非難は、人間が豚に享受できる快樂しか享受できないと想定しているからである」(CW10, 210)」というものであった。ミルによれば、「人間が豚に享受できる快樂しか享受できない」というこの想定は誤っているとされる。というのは、「人間は、動物的欲望よりも高い能力を持つ。そして、いちどその能力に気付けば、それらを満足させないものを幸福とはみなさない」(CW10, 210-1)からである。ここでミルは、動物でも享受できる身体的快樂と、知性、感情、想像力、道徳感情の快樂のような人間だけが享受できる精神的快樂との区別を導入している。

エピクロス学派を含む広い意味での功利主義者は、身体的快樂よりはるかに高い価値を精神的快樂に割り当ててきた。しかし、その理由は精神的快樂の内在的本性よりむしろ精神的快樂がもたらす外在的利点(circumstantial advantage)に基づくものであったとミルは述べている。すなわち、

「功利主義の著述家たちが一般に、主として精神的快樂が恒久性、安全性、コストがかからないことなどの点でいっそう優れているために一即ち精神的快樂の内在的本性よりも外在的利点のために一精神的快樂を身体的快樂より上位に置いてきたことを認めなければならない。そして、これらのすべての点について、功利主義者は自分たちの主張を十分に証明してきた」(CW10, 211)。

精神的快樂がその外在的利点のために身体的快樂より上位に置かれるという考え方にミルは同意する。

さらにミルは、精神的快樂が身体的快樂より価値が高いことの「もっと高級な根拠」を提示している。

「しかし彼らは、まったく整合的に、他の根拠、それももっと高級といえる根拠を採用できただろう。ある種類の快樂は他の種類の快樂より望ましく価値があるという事実を認めることは、功利性の原理とまったく両立できる。快樂以外のすべてのものを評価するときには、量のほかに質も考慮されるのに、快樂の評価は量だけに基づくと考えるのは道理に合わないだろう」(CW10, 211)。

このようにミルは、精神的快樂が身体的快樂より価値が高いという評価は、快樂の量ではなくその質に基づくと述べている。それでは、快樂の質とは何だろうか。

「2つの快樂のうち、両方を経験したすべての人またはほとんどすべての人が、一方の快樂を選好すべきだという道徳的責務のどのような感情とも関係なく、はっきりと選好する快樂があるとすれば、それがいっそう望ましい快樂である。2つの快樂の両方を熟知している人々が、一方をもう一方よりはるかに上位に置き、いっそう大きな不満足を伴うと知っていてもそれを選好し、彼らの本性が受容可能ないかなる量のもう一方の快樂と引き換えにも、もとの快樂を放棄しようとしなければ、我々はその選好された楽しみに、比較するとき量を取るに足らない事柄にするほど量を圧倒する、質の優位を帰すことが正当である」(CW10, 211)。

ここでミルは、快樂の質とは何かを説明せずに、2つの快樂のうちどちらが質の点で優れているかを判定する方法について述べている。その方法とは、両方の快樂を経験した大多数の人が快樂の量の差を度外視して選好する快樂が質の点で優れた快樂であるというものである。

そして2つの快樂の両方を経験した大多数の人が快樂の量の差を度外視して選好するのは、高次能力を行使する生き方であるとミルは述べている。すなわち、

「ところで両方を同じように熟知し、同じように評価し享受できる人々が、彼らの高次能力を行使する生き方を断然選好するということは疑いのない事実である」(CW10, 211)。

このように両方の快樂を熟知し同じように享受できる人々が、高次能力を行使する生き方を選好するのは、自尊心、自由と個人的独立への愛、力への愛あるいは高揚への愛のためであるということもできるが、尊厳の感覚 (sense of dignity) のためであるというのがもっとも適切であるとミルはいう。尊厳の感覚は、「すべての人間が、何らかの形で持っており、彼らの高次能力と、決して正確にはないが、ある程度比例して持っている。尊厳の感覚は、その感覚が強い人の幸福の本質的な部分をなしているので、これと対立するものは、瞬時をのぞけば、彼らにとって欲求の対象になり得ないほどである」(CW10, 212) とされる。

質が異なる快樂としてミルがあげているのは、人間の幸福すなわち快樂と獣の快樂 (CW10, 211, 213)、知性、感情、想像力、道徳感情の快樂と単なる感覚の快樂 (CW10, 211) すなわち精神的快樂と身体的快樂 (CW10, 211)、能動的快樂と受動的快樂 (CW10, 215) などである。これらのペアは、どれも高級快樂と低級快樂という2項対立である。だから快樂の質ということでミルの念頭にあったのは、快樂のさまざまな源泉に対応した快樂の無数のニュアンスではなく、今あげたような2項対立

のペアであったと考えられる。

高級快樂や低級快樂の具体的な内容を示すミルの叙述を、いくつか見ておく。まず『功利主義論』2章13節（以下2.13と略記）でミルは次のように述べている。

「陶冶された心—哲学者の心ではなく、知識の泉が開かれた心、かなりの程度その能力を行使することを学んだ心を私は念頭においている—は、周囲のすべての物事、すなわち自然の事物、芸術の達成、詩の想像力、歴史上の出来事、過去と現在の人類の軌跡、人類の将来の展望に尽きない関心の源を見出す」（CW10, 216）。

陶冶された心すなわち知識の泉が開かれた心は、自然、芸術、詩、歴史、人類の運命などを考察することから多くの楽しみを得る。この楽しみは、知的な快樂、想像力の快樂などであろう。つぎにミルは、『功利主義論』2.14で次のように述べている。

「要するに人間の苦痛の大きな源泉はすべて、人間の配慮と努力によって大きな程度—その多くはほぼ完全に—克服できる。そして、これらの苦痛の除去はひどく遅いものではあるが—この克服が完成し、この世界が、意志と知識が不足しない限り容易につくりかえることのできるすべてのものになるまでには、長い幾世代もの人々が、それを得ることなく滅びるだろうが—それでもなお、どんなに小さく目立たない役割にせよ、この努力の一端をになうほどの知性と寛大さを持つすべての人は、この戦いそのものから高貴な楽しみを引き出すだろう。そして、利己的な耽溺のどのような誘惑にかられても、この楽しみなしでは満足しないだろう」（CW10, 217）。

ミルによれば、知性と寛大さを持つ人は、人類の苦しみを軽減するため

の戦いに参加することから高貴な楽しみを引き出すことができるとされる。この楽しみとは、知性、共感、想像力、道徳感情などの快楽であろう。

また、父ジェームズ・ミル（James Mill）の『人間精神の現象分析』に自らが付けた註のなかで、子ミルは音楽がもたらす2つの快楽を区別している。

「音楽によって与えられた快楽の非常に多くのものが音楽の表現の効果、つまり音と連結した連合の効果であることを、大抵の人々は認めるだろう。しかし、直接の肉体的で感覚的快楽の要素もあることは、疑うことができない。……そうした連合した観念と感情とは、これらの〔感覚的〕快楽と内密に混合されるが、ある範囲で批評できる耳により識別できる。違った作曲家について、一人（ベートーヴェン）は表現においてきわめて優れているが、（モーツァルトのような）もう一人は肉体的部分においてきわめて優れているということも、可能である」⁴。

ここで子ミルは、音楽の快楽として、音と連合した観念や感情がもたらす快楽と、単音、協和音、ハーモニー、メロディなどがもたらす感覚的快楽とを区別している。そして、観念や感情の快楽に関してはベートーヴェン（Ludwig van Beethoven）が優れており、感覚的快楽に関してはモーツァルト（Wolfgang Amadeus Mozart）が優れていると彼はいう。

さらに『自叙伝』のなかでミルは、ワーズワース（William Wordsworth）の詩がもたらす2つの快楽を区別している。

「しかし、もしワーズワースが自然の風景の美しい描写を私の前に示してくれただけであったならば、彼は、私にあれほど大きな影響を与えることはまったくなかったであろう。……しかし、ワーズワー

スの詩を私の心の状態の特効薬としたのは、彼が外的な美だけでなく、美しさに触発された感情と感情に彩られた思想の状態を表現していたからである。それこそ私が求めていた感情の陶冶そのものであるように思われた。私は、彼の詩を読んで、万人によって共有されることができる内的喜びの源泉、共感と想像力の快樂の源泉から汲み出すように思われた」(CW1, 150)。

ワーズワースの詩は、自然の風景の外的な美しさを表現することによって感覚的な快樂をもたらすだけでなく、美しさに触発された感情と感情に彩られた思想の状態を表現することによって共感と想像力の快樂をもたらすもするとミルは述べている。

本節で見たような、快樂の質についてのミルの考え方は、快い心理状態にのみ内在的価値がありその価値の大きさは快樂の強度や持続時間などに応じて決まるといふ、ベンサム (Jeremy Bentham) のいわゆる量的快樂主義を修正するものとなる。量的快樂主義の立場をとれば、ハイドン (Franz Joseph Haydn) が作曲する楽しみと牡蠣が温暖な海水につかることで得る快樂⁵、あるいは子供を失った悲しみと歯痛、二日酔いの苦しみ⁶を同一の単位で測定できるという奇妙な結果に行き着く。快樂の価値を評価するさいに快樂の質を考慮に入れるミルの考え方をとれば、このような結果に行き着かない。

(II-1) 快樂の質の相違をその量の相違に還元する解釈

ミルのいう快樂の質とその量の関係についてソーサ (Ernest Sosa)⁷、ラファエル (Daiches Raphael)⁸、ゼス (James Seth)⁹らは、高級快樂が低級快樂より高い価値を持つのは、高級快樂が低級快樂より大きな量の快樂を含むからであるという解釈を提示している¹⁰。この解釈を支持するテキストとしてまずあげられるのは、『功利主義論』5.25 の以下の箇所

ある¹¹。

「従って、我々の生存の基盤自体を我々のために安全にすることに協力するように、我々が同胞に求める請求の観念は、いっそうありふれた効用のケースに関わる感情よりはるかに強い感情をその周囲に集めるので、程度の差が（心理学のケースによくあるように）質の实在的な差になるほどである。その請求は、正邪の感情と通常の便・不便の感情との区別をなす絶対性の性格、明白な無限性の性格、他の考慮事項との通約不可能性の性格を持つ」（CW10, 251）。

ここでミルは、生存の基盤を安全にすることに對する請求が他の効用よりもはるかに強い感情を伴うので、その感情の程度の差が質の相違をもたらすほどであると述べている。これと同じように、程度の差が質の差をもたらすことは心理学のケースではしばしば起こるとされる。このように量の差が大きくなってついに質の差に転化するとミルが考えているとすれば、彼のいう快樂の質の差とは非常に大きくなった量の差であるように思われる。

ミルのいう快樂の質の相違とはその量の大きな差であるという解釈を支持する第2の根拠としてあげられるのは、『功利主義論』2.6 の以下の箇所である¹²。

「[高次能力を持つ存在者が低劣な存在と感じるものに身を落とそうと願うことは決してないという] この選好が幸福を犠牲にして生じる一同じような状況では優れた存在者は劣った存在者より幸福でない (that the superior being, in anything like equal circumstances, is not happier than the inferior) ーと考える人は、幸福と満足という2つの非常に異なる観念を混同しているのである。享受能力の低い存在者は、それを十分満足させる機会にもっとも恵まれているが、豊かな天分

を持つ人は、自分の求めうる幸福が、この世界の成り立ちによって不完全であるといつも感じるだろう。しかしこういう人は、その不完全さが耐えられるものである限り、耐えることを習得できる。そして、不完全だからといって、その不完全さをまるで意識しないが、そうであるのはこのような不完全さが条件を付ける善をまったく感じないからでしかない存在者を羨んだりしないだろう。満足した豚であるより不満足な人間であるほうが良い (better)。満足した愚か者であるより不満足なソクラテスであるほうが良い (better)。そして愚か者や豚が異なる意見を持っているとすれば、彼らがこの問題について自分たちの側面しか知らないからに過ぎない。この比較の相手方は、両方の側面を知っている」。

高級快樂を享受できる優れた人が低級快樂しか享受できない劣った人より幸福 (happier) でないという見解は、幸福と満足の混同に基づく誤ったものであるとミルは述べている。つまり彼の考え方によれば、高級快樂を享受できる人は不満足なときでも、低級快樂しか享受できない満した人より幸福であるとされる。そしてミルはこの見解を、「満足した豚より不満足な人間であるほうが良い (better)。満足した愚か者であるより不満足なソクラテスであるほうが良い (better)。」という形で言い直している。ということは、この「より良い (better)」という言葉は「いっそう幸福である (happier)」という意味で用いられている。そうだとすると、ここでミルが言おうとしているのは、少量の高級快樂を享受する人は多量の低級快樂を享受する人より幸福であるということである。「幸福とは快樂と苦痛の不在を意味する」(CW10, 210) と考えるミルにとって、「より幸福である」とは幸福の程度すなわち快樂の量が大きいことでなければならない¹³。従って、少量の高級快樂が多量の低級快樂より快樂の量が多いとミルは考えていたということになる。

(Ⅱ－2) 快樂の質の相違とはその量の大きな差であるという 解釈の検討

快樂の質の相違とはその量の大きな差であるという解釈の問題点としてあげられるのは、第1に、(Ⅱ－1)で引用した『功利主義論』2.6と5.25がこの解釈の十分な証拠にならないということであり、第2に、この解釈が『論理学体系』や『功利主義論』の叙述と整合しないことである。

第1の問題点のうち、まず『功利主義論』5.25についてみれば、確かに心理学のケースでは、きわめて強い感覚や感情と穏やかな感覚や感情との程度の相違が質あるいは種類の相違と感じられるケースがある。たとえばつづやきの音量をしだいに大きくしていくとついには叫びや轟音に変質する。しかしこの事実から、感覚や感情のあらゆる質の相違が、非常に大きくなった程度の相違であるとはいえない。従って、『功利主義』5.25は、ミルのいう快樂の質の相違がその量の大きな差であるという解釈の証拠としては不十分なものである。

つぎに(Ⅱ－1)で引用した『功利主義論』2.6もこの解釈を支持しない。というのは、そこでミルは少量の高級快樂が多量の低級快樂より快樂の量が多いという見解をとっていないからである。既に見たように『功利主義論』2.6でミルは、少量の高級快樂を享受する不満足なソクラテスは、多量の低級快樂を享受する満足した愚か者より幸福(happier)であるという見解をとっていた。しかしミルにとって、いっそう幸福であるということは、幸福すなわち快樂の量が多いということと同じではない。このことは、「他のすべてのものを評価するときには、量のほかに質も考慮されるのに、快樂の評価は量だけに基づくと考えるのは道理に合わないだろう」という『功利主義論』2.2の叙述から分かる。ここでミルは、快樂の評価と快樂の量をはっきりと区別して、快樂の量はその質とともに快樂の評価を決定する要因であるととらえている。だからミル

の考え方によれば、いっそう幸福であるという幸福すなわち快樂の評価と、快樂の量とは同じ事柄ではない。そうすると、少量の高級快樂を享受する人が多量の低級快樂を享受する人より幸福であるという見解をミルがとっていたということから、少量の高級快樂が多量の低級快樂より快樂の量が多いという見解を彼がとっていたということは帰結しない。それゆえ『功利主義論』2.6 は、ミルのいう快樂の質の相違がその量の大きな差であるという解釈を支持しない。

この解釈の第2の問題点としてあげられるのは、『論理学体系』や『功利主義論』の叙述と整合しないことである。まず『論理学体系』においてミルは、「属性は通常、質、量、関係の三項目に分けられる」と述べて、質と量を異なる属性であると見なしている。そして、彼は質と量の区別について以下のような例をあげて説明している。

「そして、我々は 10 ガロンの水を 1 ガロンの水と間違えないので、その2つのケースで感覚の組合せがいくらか異なることは明らかである。同じように、1 ガロンの水と 1 ガロンのワインは、相互に異なる2組の感覚によってその現前を知らせる2つの外的対象である。しかし初めのケースで、相違は量に関するものであると我々はいう。後者のケースで、水とワインの量が同じであるのに対して、質の相違があると我々はいう」(CW7, 73)。

1 ガロンの水と 1 ガロンのワインには質の相違があり、その相違は感覚によって知られるとミルは述べている。さらに、質と量を区別する根拠についてミルは次のようにいう。

「しかし、私の目的は以下のことを示すことである。すなわち、2つの事物についてそれらが量の点で異なると我々がいうとき、それらが質の点で異なるというときと同じように、その主張はそれらの事

物が喚起する感覚に常に基づくということである」(CW7, 73)。

このようにミルの考え方によれば、質と量は事物が喚起する感覚内容(sensations)に基づいて区別された異なる属性であるとされる。ミルのこの考え方は、彼のいう快樂の質の相違がその量の大きな差であるという解釈と整合しない。

また、この解釈は『功利主義論』のいくつかの箇所とも整合しない。まず『功利主義論』2.10でミルは以下のように述べている。

「「最大幸福原理」によれば、既に説明したように、究極目的は、量と質の両方の点で (both in point of quantity and quality) できるだけ苦痛を免れできるだけ楽しみが豊かな生存であり、(我々自身の善に配慮するにせよ他人の善に配慮するにせよ) 他のあらゆる事柄はこの究極目的に関連して望ましく、そのために望ましいのである。」(CW10, 214)。

ここでミルは、楽しみ(enjoyment)すなわち快樂の豊かさが量と質の両方の点で評価されると述べている。この叙述が示唆しているのは、ミルが採用していたのが、快樂の質の相違とはその量の大きな差であるという考え方ではなく、快樂の量の差とその質の相違とは別の事柄であるという考え方であったということである。

つぎに、(I)で見たように『功利主義論』2.5でミルは以下のように述べていた。「2つの快樂の両方を熟知している人々が、一方をもう一方よりはるかに上位に置き、いっそう大きな不満足を伴うと知っていてもそれを選好し、彼らの本性が受容可能ないかなる量の(any quantity)もう一方の快樂と引き換えにも、もとの快樂を放棄しようとしなければ、我々はその選好された楽しみに、比較するとき量を取るに足らない事柄にするほど量を圧倒する、質の優位を帰すことが正当である」。ここで、

両方の快樂を熟知した人は、質の劣った快樂のいかなる量と引き換えにも質の高い快樂を放棄しないとミルは述べているので、彼のいう快樂の質の差とはその量の大きな差ではない。また「比較するときに量を取るに足らない事柄にするほど量を圧倒する質の優位」と彼がいうとき、質は量とは別の事柄であると見なすのが無理のない解釈であろう。

さらに『功利主義論』2.4 でミルは「快樂以外のすべてのものを評価するときには、量のほかに質も考慮されるのに、快樂の評価は量だけに基づくと考えるのは道理に合わないだろう」と述べていた。ここでもミルは、快樂の量とその質とが別の事柄であると見なしているように思われる。このように、快樂の質の相違がその量の大きな差であるという解釈は、『論理学体系』だけでなく『功利主義論』の叙述とも整合しない。

(III-1) 快樂の質とは何か

前節で見たように、ミルのいう快樂の質の相違とはその量の大きな差であるとする解釈はうまく行かなかった。いっそう有望な解釈は、ミルのいう快樂の質とは、その種類であるというものである¹⁴。この解釈を支持するテキストとしてまずあげることができるのは、(I) で引用した『功利主義論』2.4 である。そこでミルは、快樂の種類をその質と言い換えていた。この解釈を支持する別のテキストは、『功利主義論』2.8 の以下の箇所である。

「唯一の適格な裁判官たちのこの判決から、もはや上告がありえないと私は認める。2つの快樂のうちどちらが持つに値するかという問い、また2つの生き方のうち、その道徳的屬性や結果は別にして、どちらが感情にとって喜ばしいかという問いについては、両方の知識を持つ有資格者たちの判断が、また彼らの判断が異なる場合にはその多数者の判断が、最終的なものとして認められなければならない

い。そして快樂の量の問題に関してさえ、これ以外に訴えるべき法廷がないのだから、質（quality）に関する彼らの判断を受け入れるのをためらう必要はさらに少ないのである。2つの苦痛のどちらが激しいか、2つの快い感覚のどちらが強いかを判定するのに、両方をよく知っている人々すべての投票以外に、どのような手段があるだろうか。苦痛も快樂も同質ではない。そして苦痛と快樂とは常に異質である。個々の快樂が個々の苦痛という犠牲を払って購う価値があるかどうかを決めるものが、経験者の感情と判断以外にあるだろうか。こういうしだいだから、経験者の感情と判断が、高次能力から生じた快樂が、高次能力から切り離された動物本性が感じる快樂より、強度の問題はさておき、種類の点で（*in kind*）望ましいと宣告するとき、経験者の感情や判断は、この問題に関して同じように尊重されてしかるべきである」（CW10, 213）。

まず、質（quality）または量の点で異なる2つの快樂のうちどちらが望ましいかという問いについては、両方の知識を持つ有資格者の判断が、また彼らの判断が異なる場合にはその多数者の判断が、最終的なものとして認められなければならないとミルは述べている。その後、高次能力から生じた快樂と動物本性が感じる快樂との両方を経験した人の感情や判断が、高次能力から生じた快樂のほうが種類（kind）の点で望ましいと告げるとき、その感情や判断を尊重すべきであるとミルは続けて述べている。従って、ミルのいう快樂の質とその種類は同じ事柄を指す。

さらに、ミルのいう快樂とはその種類であるという目下の解釈を支持するものとしてあげられるのは、1854年5月23日付の彼の日記である。すなわち、

「幸福の量と同じように質（quality）が考慮されるべきである。より少ない高級な種類の快樂は、より多い低級な種類の快樂より望まし

い (less of a higher kind is preferable to more of lower)」(CW17, 663)。

ここで彼は幸福すなわち快樂の質を、その種類と言ひ換えている。従つて、彼のいう快樂の質とはその種類である。

(III-2) 快樂の種類とは何か

それでは、快樂の「種類」とは何だろうか。この問いに答えるために、『論理学体系』の以下の箇所が役立つ。

「事物の間に実在する相違のうちのあるものを、種類（種あるいは類）の (*in kind (genere or specie)*) 相違と見なし、他の相違を偶有性の相違に過ぎないと見なすことは誤りだろうか。」(CW7, 121)。

ここでミルは、種類とは種あるいは類であると述べている。そして、ミルは、種類の相違を偶有性の相違と対比して、次のように説明している。

「さて未知の多数の特性によって区別され単に少数の既定の特性によって区別されたのではないこれらのクラスは、一底が見える単なる普通の溝によってではなく、不可測の深淵によって相互に隔絶している—アリストテレス学派の論理学者によって類または種と考えられた唯一のクラスである。ある単一または複数の特性のみに及んでそこで終わっている相違を、彼らは、事物の偶有性 (*accidents*) のみに関わる相違であると考えた。何らかのクラスが、既知または未知の無限な系列の相違によって他の事物と異なる場合、彼らはこの区別を種類 (*kind*) の区別と考え、この区別が、この曖昧な表現の今日流布している意味の一つでもある本質的 (*essential*) 区別であると述べた。

スコラ学者がこれら2種類のクラスおよびクラスの区別の間に太い区分線を引いたのは正しかったと私は考えるので、この区分自体を維持するだけでなく、その区分を彼らの言葉で表現し続けるつもりである」(CW7, 123)。

種類とは、無限数の特性によって他のクラスから区別されたクラス、すなわち不可測の深淵によって相互に隔絶したクラスであるとミルは定義している。そして彼は、種類の例として動物、植物、鳥類、ヒトなどをあげている (CW7, 122)。それらが種類であるとされるのは、それらに共通する特性が無数にあるからである。たとえばすべてのヒトに共通する特性としてミルがあげているのは、理性を持つこと、外見がヒト型であること (CW7, 128)、食物を調理すること (CW7, 126)、それぞれの顎(上顎と下顎)における4個の門歯、分離した歯を持ち、直立姿勢を取ること (CW7, 129) などである。さらに、ヒトに共通する特性について生理学者が探求し続けているが、完全な答えはえられそうにないとミルは述べている (CW7, 124)。これに対して、白いもの、キリスト教徒、数学者などは種類ではなく事物の偶有性の相違であるとされる。というのは、これらのクラスは白さ、キリスト教を信仰していること、数学を研究していることという単一の特性によって他のクラスから区別されるからである。

『功利主義論』における快樂の「種類」と『論理学体系』における事物の「種類」が同じ事柄を指すという、今述べた見解を支持する3つの理由がある。第1に、『功利主義論』2.4の「快樂以外のすべてのもの (all other things) を評価するときには、量のほかに質も考慮されるのに、快樂の評価は量だけに基づくと考えるのは道理に合わないだろう」という文から、快樂以外のすべてのものの質すなわち種類と快樂の質すなわち種類とは同じ事柄を指すと考えられる。第2に、『論理学体系』はミルの哲学体系にとって中心的なものであり、『功利主義論』を含む彼の道徳哲学

の基盤ともなっている。だから、『功利主義論』における快樂の種類についての彼の考え方が、『論理学体系』における種類に関する考察に基づくと考えるのは自然な解釈である¹⁵。第3に、動物、植物、ヒトに共通する特性が生物学や自然哲学によって探求され続けてきたが、単一または複数の特性として確定できそうにないのと同じように、知性、感情、想像力、道德感情の快樂あるいは感覚の快樂に共通する特性は、心理学や道德哲学によって探求され続けてきたが、単一またはいくつかの特性として確定できそうにない。従って今述べた快樂の2つの種類は、『論理学体系』における種類に該当する。

(III-3) 種類が意味するもの

既に見たように、ミルのいう快樂の質の相違とはその量の差ではなく、その種類、すなわち無限数の特性によって他のクラスから区別されたクラスであった。この解釈の問題点として残るのは、快樂の質をその種類と言い換えただけで、快樂の種類がどのような事態を指示するのか、とりわけ快樂の種類とその量をどのように比較考量するのかが十分に明確でないことである。

この問題点を克服するために、快樂の異なる種類どうしの関係を実数と虚数の関係と類比的にとらえてみたい。実数と虚数の間には量的な比較が成り立たない。たとえば実数 3 と虚数 $100i$ の間には、 $(3 > 100i)$ & $(3 \neq 100i)$ & $(3 < 100i)$ という関係が成り立つ。ただし $3 < 100$ というように、実数の単位 1 と虚数の単位 i の数量どうしを比較することはできる。すべての虚数が、価値を表す数直線 V 上の点 $V1$ から点 $V2$ までの範囲に対応 (写像) し、すべての実数が数直線 V 上の点 $V3$ から点 $V4$ の範囲に対応する仮定しよう ($V1 < V2 < V3 < V4$ とする)。その場合、任意の実数と任意の虚数の間には量の比較が成り立たないにもかかわらず、任意の実数の価値は任意の虚数の価値より大きい。

実数と虚数を量で比較することができないのと同じように、高級快樂と低級快樂を量で比較することはできない。つまり高級快樂のある量を HP、低級快樂のある量を LP と表記し、 n を十分に大きい任意の自然数とすれば、 $(1HP \succ nLP) \ \& \ (1HP \neq nLP) \ \& \ (1HP \prec nLP)$ という関係が成り立つ（ただし n が 1 より大きいという意味で、高級快樂と低級快樂の見かけの量を比較することはできる）。すべての低級快樂が、価値を表す数直線 V 上の点 $V1$ から点 $V2$ までの範囲に対応し、すべての高級快樂が数直線 V 上の点 $V3$ から点 $V4$ までの範囲に対応するとしよう ($V1 < V2 < V3 < V4$ とする)。その場合、高級快樂と低級快樂との間には量の比較が成り立たないにもかかわらず、任意の量の高級快樂は任意の量の低級快樂より価値が高い。従って、少量の高級快樂が多量の低級快樂より高い価値を持つことになる。

結 び

ミルのいう快樂の質がその量の大きな差であるという解釈はうまく行かなかった。というのは、この解釈を支持する十分な証拠がなく、しかもこの解釈は『功利主義論』や『論理学体系』の叙述と整合しないからである。一方、ミルのいう快樂の質がその種類であるという解釈は正しい方向を指していたが、快樂の種類と、快樂の量やその価値との関係が十分に明確でないという問題点を抱えていた。そこで本稿では、快樂の異なる種類どうしの関係を実数と虚数の関係と類比的にとらえることによってこの問題点を克服し、快樂の質がその種類であるという解釈を補完した。

(みずの・としなり 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程)

-
- * ミルの著作からの引用はすべて、*Collected Works of John Stuart Mill*, 33 Vols., Robson, J. M. general ed., Toronto and London, Toronto University Press and Routledge, 1965-91 から行う。本文中の引用は、略号 CW、巻数、頁数の順に記す。なお、訳出に際しては以下の文献を適宜参照した。大関将一、小林篤郎訳『論理学体系 I-IV』、春秋社、1949-59 年、伊原吉之助訳「功利主義論」、関嘉彦編『ベンサム J・S・ミル』、中央公論社、1979 年、山下重一訳註『評伝 ミル自伝』、御茶の水書房、2003 年。
- 1 Edwards, R.B., *Pleasures and Pains: A Theory of Qualitative Hedonism*, Ithaca and London, Cornell University Press, 1979, p.32.
 - 2 水野俊誠「J.S.ミルにおける異質な快樂の優劣に関する一考察」、『エティカ』第1号、2008年、85-101頁。
 - 3 正確に言えば、これは、ミルが広い意味での功利主義者とみなすエピクロス学派の論者の応えであるが、ミルはこの応えを支持している。
 - 4 Mill, J., *Analysis of the Phenomena of the Human Mind*, Vol.2, 2nd. ed., London, Longmans, Green, Reader & Dryer, 1869, pp.241-2 (小泉仰『ミルの世界』、講談社、1988年、289頁)。
 - 5 Crisp, R., *Mill on Utilitarianism*, London, Routledge, 1997, pp.23-5.
 - 6 Schneewind, J.B., Introduction of Mill's Ethical Writings, Schneewind, J.B. ed., *Mill's Ethical Writings*, London, Collier-Macmillan, 1965, pp17-20. 泉谷周三郎「ジョン・スチュアート・ミルによる快樂の量と質の区別について」、『哲学倫理学研究』100、1975年、98頁。
 - 7 Sosa, E., Mill's Utilitarianism, Smith, J.M. ed., *Mill's Utilitarianism: Text and Criticism*, Belmont, Wadsworth Publishing Company, 1969, pp.154-72.
 - 8 Raphael, D. D., Fallacies in and about Mill's Utilitarianism, *Philosophical Review* 30, 1955, pp.344-57.
 - 9 Seth, J., Alleged Fallacies in Mill's Utilitarianism, *Philosophical Review* 17, 1908, pp.469-88.
 - 10 これに近い解釈として、快樂の質の差とはその量の無限の差であるというライリー (Jonathan Riley) の解釈 (Riley, J., On Quantities and Qualities of Pleasure, *Utilitas* 5 (2), 1993, pp.291-300.)、高級快樂が低級快樂より価値が高いのは、高級快樂と結びついた生き方が低級快樂と結びついた生き方より多くの快樂をもたらすからであるというロング (Roderick Long) の解釈などがある (Long, T.L., J. S. Mill's Higher Pleasures and the Choice of Character, *Utilitas* 4 (2), 1992, pp.279-97.)。
 - 11 Soca, *op. cit.*, p.162.

-
- 12 Raphael, *op. cit.* p.353.
 - 13 Ibid.
 - 14 Donner, W., Mill's Theory of Value, West, H. ed., *The Blackwell Guide to Mill's Utilitarianism*, Oxford, Blackwell Publishing, 2006, pp.117-38, Donner, W., Mill's Utilitarianism, Robson, J. ed., *The Cambridge Companion to Mill*, Cambridge, Cambridge University Press, 1998, pp.255-92.
 - 15 Hoag, R.W., J. S. Mill's Language of Pleasures, *Utilitas* 4 (2), 1992, p.249.